

聖マリア国際協力ニュース

第107号

平成21年7月1日発行

パレスチナ母子保健リプロダクティブヘルス向上プロジェクトフェーズ2 短期専門家派遣（看護師・助産師現任研修計画） 国際事業部 高岡宣子



①オリーブ山よりエルサレムを臨む

看護師・助産師現任研修計画の短期専門家として、2009年4月12日から5月2日まで派遣されました。パレスチナ自治区では、イスラエル政府による長期にわたる分離政策の影響による分離壁や外出禁止令が女性の行動を阻害し、また、経済活動の停滞による貧困とあいまって、母子保健に深刻な影響を与えています。本プロジェクトは、保健医療従事者への研修や母子健康手帳の普及活動などを通じて、パレスチナ自治区全域の母子保健・リプロダクティブヘルスサービスの向上を目標としたプロジェクトです。フェーズ1では一次医療施設に母子健康手帳を導入しましたが、フェーズ2では、導入された母子健康手帳の定着・自己財源化、母子保健・リプロダクティブヘルスサービスの拡大を目標としています。



③遊牧民のテント

330万人が居住しています。パレスチナ自治区には一次医療施設（4レベル）、二次医療施設があり、妊産婦健診は、一次医療施設で行われ、分娩は二次医療施設と完全に分業化されています。今回の派遣は、一次医療施設に配置された看護師・助産師の研修計画を立案することでした。日本の助産師にとっては、看護師の教育は必須ですが、パレスチナでは、看護師の教育は必須ではありません。また、教育内容も十分に統一されてはいないので、知識や技術に差があります。従って、知識や技術のある一定の水準に引き上げる必要があります。今まで、多くのドナーが研修の機会を設けてきたようですが、殆どが講義中心だったため、講義の内容が現場での活用に繋がらないなどの問題も指摘されていました。そこで、演習とロールプレイングを多く取り入れた形の研修計画を立案し、研修は10月ごろから、看護大学をお借りし実施する予定です。また、プロジェクトのフェーズ2では、二次医療施設にも母子健康手帳を導入し、周産期医療を継続・安定して提供できるようにすることが大きな課題の一つです。



②分離壁

さて、パレスチナと聞いて皆さんが連想されるのは、パレスチナ自治政府初代大統領、故アラファトPLO（パレスチナ解放機構）議長だと思いがちですが、では、何故パレスチナとイスラエルは戦っているのでしょうか？簡単に言ってしまうと領土問題ですが、背景には政治、宗教、歴史が複雑に絡んでいるので、非常に険しい和平への道のりとなっています。

パレスチナ自治区（ヨルダン川西岸とガザ地区）は、1994年に設立されたパレスチナ自治政府により管理され、900万人強とされるパレスチナ人の3分の1、約

写真の説明

- ① この地域にあるエルサレムはキリスト教、ユダヤ教、イスラム教の共通の聖地です。聖書には死者の復活が記されているので、周囲の白い箱は全てお墓です。
- ② 分離壁：この分離壁のために、大きく迂回したりすることが強いられ、生活に多大な影響を与えています。例えば、陣痛が来ても以前は10分で病院に行けたが、分離壁のせいで、1時間以上かかるなどです。
- ③ ベドウィン（遊牧民）のテント：分離壁のせいで遊牧が困難になってきています。

ISAPH ラオス事務所より～職員旅行報告

平成21年1月15日より約5か月間ラオス国に出張しました。業務はこれまでと同様、ISAPHの村での母子保健活動の支援です。今回の報告は趣向を変え、初めてISAPHラオス事務所が実施した職員旅行についてお知らせしたいと思います。

ISAPHラオス事務所では、当初ラオス人職員は3名のみでしたが、現在は運転手も含め7名の現地職員がいます。村での活動も軌道に乗り、毎月、半分以上の日をフィールド活動に費やしていますが、多忙のため、なかなか職員同士の親睦を深める機会がない状態でした。そこでラオス事務所では、福利厚生の一環として、職員旅行を3月上旬に実施しました。今回の旅行では職員一人が張り切って、行き先や旅程の決定から、食糧の調達、参加者の確認、参加者のピックアップ時間の設定に至るまで、ぬかりない準備をしてくれました。

特定非営利活動法人 ISAPH 齋藤智子

全員参加ではありませんでしたが、参加した職員の家族や親族、友達まで加わり、ISAPHのピックアップトラックは満員状態でした。

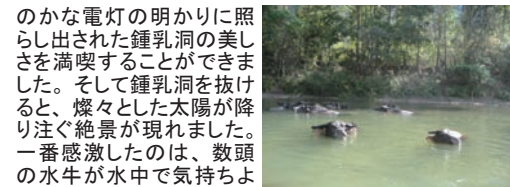
行先はラオスでも有名なカムアン県の大鍾乳洞でした。すぐ到着するものと思いましたが、出発して数時間が経つとも一向に着く気配はありません。そして、もうすぐ到着という地点で車が突然、全く動かなくなりました。そこは幹線道路から奥にかなり入った所で、助けを求めようにもなかなか車が通りません。（※右頁へ続く）



鍾乳洞の中で

（※左頁より続く）お昼も近かったので、車を路肩に移動させ、道端にゴザを出して、とりあえずここでご飯を食べようということになりました。鍾乳洞はここから徒歩で10分ぐらいの距離なのですが、食事が済むと、数名の職員は私たちを置いて、さっさと歩いて行ってしまいました。残った私たちは助けを求めて待つしかありません。すると偶然通りがかった乗合タクシーが止まり、運転手がトラックのエンジンを点検してくれました。おかげで再びエンジンが作動するようになり、ようやく目的地へ到着することができましたが、時間はすでに午後2時をまわっていました。

鍾乳洞にはラオス国内はもとより、海外からも旅行者が大勢集まっています、とても賑わいのある場所でしたが、私たちが到着した時、先発隊はすでにポートでの鍾乳洞ツアーに出発した後でした。私たちが続いて行きましたということになり、5人乗りのポートに乗客3名、船頭、その助手が乗り込み、往復4時間のツアーにわくわくしながら出発しました。鍾乳洞の中は真っ暗ですが、ほ



水浴び中の水牛

のかな電灯の明かりに照らし出された鍾乳洞の美しさを満喫することができました。そして鍾乳洞を抜けると、燦々とした太陽が降り注ぐ絶景が現れました。一番感激したのは、数頭の水牛が水中で気持ちよさそうに佇んでいる脇を通り過ぎた時です。まさにラオス・サファリ状態。その後、帰りのポートでは、途中でガス欠のためポートが止まってしまうアクシデントに見舞われましたが、なんとか無事に出発地点に戻って来ることができました。

楽しい経験になりましたが、いろいろとトラブルに遭ったこともあり、あれほどの遠出をしてまで、また行くほどの場所でもない、とも思いました。今回の教訓は、「職員旅行はもっと近場で、無理なく楽しむのがいい」ということでした。

念願だった日本での研修を終えて

私が勤務する忠南大学校病院では「日本での新生児室の研修」が研修3年次の研修課程の一つで、そのため毎年、小児科の研修医が聖マリア病院で研修を受けさせていただいています。これまでに聖マリア病院に行った経験がある先輩たちの多くは、研修を通して得られたものが多かったようで、日本で学んだことを韓国で実践しようと努力しています。

私の場合、卒業した大学の附属病院にずっと勤務している中で、他の病院を見てみたいという気持ちが強かったこともあり、日本での研修をずっと心待ちにしていました。

最初に聖マリア病院のNICUに入ったとき、韓国とそれほど変わらないと思いましたが、広々とした空間に漂う落ち着いた雰囲気は、私が勤務する病院では感じられないものでした。

朝の回診は楽しい雰囲気で行われ、みな自由に議論する姿が印象的でした。

研修の中で感心したことはたくさんありますが、中でも一番印象深かったのが、いつでも赤ちゃんに面会できることを含め、すべての面で患者中心のシステムが構築されていることでした。私の病院では1日2回しか面会できず、しかも新生児室の中に入ることは許されません。

また聖マリア病院の方がマンパワーの点でも充実しており、医療機器の大部分も私の病院より良いものが備えられていました。看護師は私の病院の2倍ぐらいの人数が配置されていました。ポータブルのX線装置が常に準備されている点、また少量の血液で基本的な血液検査が可能である点なども、私の病院との大きな差だと感じました。

アルコール綿をはじめ、あらゆる材料がディスポーザブルであったことにも驚きました。感染症防止の観点から、これは非常に重要なことだと思います。

状態が安定している赤ちゃんに対して、常に緊急の処置に備えた準備がなされていることや、周辺の病院から患者受入れの依頼があれば、医師同乗のうえ、こちらから救急車で迎えに行くことにも感銘を受けました。また私の病院ではあまり行われない診断方法や処置を目の当たりにすることができたのも、貴重な経験でした。

韓国 忠南大学校病院 金 勤希

た。ぜひ私の病院でも試行してみる価値があると思います

日本の医療従事者は皆親切で、お互いに助け合いながら仕事を行う姿勢は素晴らしいものでした。

週末には福岡市に行き市内観光をしました。韓国語の案内がたくさんあったので、道に迷うこともありませんでした。もちろん観光目的で日本に来たのではありませんが、一人で外国を自由に歩き回り、いろいろなことを考えることができたことも、私にとって貴重な経験の一つでした。

短い2週間の滞在でしたが、おかげ様で多くのことを学ぶことができました。

最後に、私の研修を受け入れてくださった聖マリア病院をはじめ、滞在中のお世話をくださった国際事業部の矢山さん、流暢な韓国語でお話をしてくださった浦部先生、そして私の質問にいつも親切に答えてくださった新生児科の先生方、すべての皆様に感謝を申し上げます。本当にありがとうございました。

※金勤希（Kim Kyoung-hee）さんは5月12日～22日の期間、当院新生児センターにて研修を受けられました。

今月の動き

【研修受入】

- ・7月7日（火）～17日（金）
韓国忠南大学校病院の小児科医1名が新生児センターにて研修。
- ・7月27日（月）～29日（水）
スリランカ国健康増進・予防医療サービス向上プロジェクトのカウンターパート研修を実施。